

は

ち

か

づ

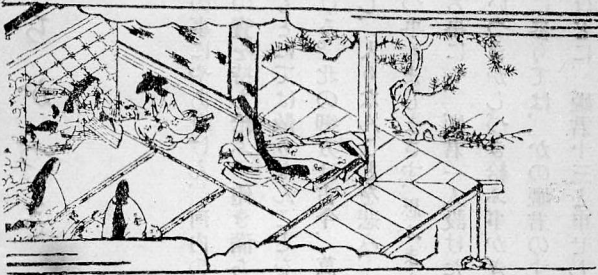
き

# はちかづき

中昔の事にやありけん、河内の國交野かたのの邊へんに備中の守さねたかといふ人まし／＼けり。  
かすの寶を持ち給ふ。飽き満ちて乏しきこともまします、詩歌しいかくわんげん管絃くわんげんに心をよせけるが、  
花のもとにては散りなんことを悲み、歌をよみ詩をつくり、のどけき空をながめ暮らし  
給ひける。北の御方は古今、萬葉、伊勢物語、かすの艸子を御覽じて、月の前にて夜を  
あかし、入りなんことを悲み、あかし暮らし給ひつゝ心に残ることもなし。鴛鴦うんわうのむす  
び隔つ事もまします、思ふまよなる御中なるに御子一人もなし。朝夕悲み給ひしに、い  
かなる事にや、姫君一人設けたまひて、父母ちちははの御よろこび申すばかりは無かりけり。か  
くていつきかしづき給ふ事かぎりなし。あけくれ觀音を信じ申されけるほどに、長谷はせの  
觀音に参りては、かの姫君のする繁昌の果報あらせ給へとぞ祈りたまふ。かくて年月を  
ふるほどに、姫君十三と申せし年、母上例ならず風の心地との給ひて、一日二日と申せ

かんざし一髪

かくこそ詠じ給  
ひける一係結の  
破格なるも原本  
のまゝにして一  
切改めず



しほどに、今をかぎりに見えければ、姫君をち  
かつけて、緑のかんざしを撫であけ、あらむざ  
んやな、十七八にもなし、いかなる縁にもつけ  
おき、心やすく見おき、ともかくにもならず  
して、いとけなき有様をすて置かんこと、あさ  
ましさと涙をながし給ふ。姫君ももろともに  
涙をながし給ひける。母上は流るゝ涙をおしと  
どめ、そばなる手筈を取りいだし、中には何を  
か入れられけん、世におもけなるを姫君の御ぐ  
しに戴かせ、その上に肩の隠るゝほどの鉢をき  
せまゐらせて、母上かくこそ詠じ給ひける。

さしも草ふかくぞ頼む觀世音誓のまゝにい  
たどかせぬる

かやうにうちながめ給ひて、遂に空しくなり給

孝養—佛事供養

梅が枝の云々—  
文章つゞかぜ、

一本には「春は  
軒端の梅の花櫻  
は風にちりぬれ  
ど又くる春に開  
きけり月は山の  
端に入りぬれど  
又こんゆふべに  
出て給ふ」とあ  
り

そでまくら—袖  
を枕に歎く意、  
一本には此句な

ふ。父大きに驚き泣き給ひて、いとけなき姫をば何とて棄ておき、いづくとも知らずか  
くなり給ふと、泣き給へどかひぞなき。かくてさして有るべきならねば、なごりつきせ  
ず思へども、むなしき野邊に送りすて、花のすがたも煙となる、月のかたちは風となり  
散りはつるこそいたはしけれ。かくて父御前ちちごぜん姫君をちかづけまゐらせて、いたゞき給  
ひたる鉢とらんとしけれども、吸ひつきて更にとられず。父大きに驚きて、いかゞはせ  
ん、母上にこそは離れまゐらせめ、かゝるかたはのつきぬることの浅ましきよと、歎き  
たまふこと限りなし。かくて月日をたてければ、あとの孝養けうやうとり行ひたまふ。おもひは  
姫君の御まへにこそとどまりけれ。春は軒端の梅が枝えの、さくらは咲きて梢まばらの青  
葉とぞ、名残をしくは思へども、又またこん春を待ちてさく。月は山の端はに入りぬれど、今  
夜の闇とへだつれど、又こんゆふべに出て給ふ。わかれし人の面かけ、夢路にだにも定  
かならず、いつの日のいつの暮にかわかれちを、いかなる人の踏みそめて、現うつもにも逢ふ  
ことなかるらん。思ひまはせば小車こぐるまのやるかたもなき風情かなと、よその見るめもあは  
れなり。さるほどに父御前の一族、親しき人々よりあひて、いつまで男子おとこのひとり住み  
がたしと、このそでまくら、歎きくゞき給ふともそのかひはよもあらじ、いかなる人を

く、「そのこの一人すまんとて歎き明かし給ふとも」とあり

移つればかはる世の中の云々—小町「色見えでうつるふものは世の中の人の心の花にぞありける」

なみの起居に—金葉七「あふ半はいつと渚の濱千鳥波の立居にねをのみぞ鳴く」の語を取れざんそう—讒訴

おろか—我身に  
おろそかなり

もかたらひて、憂きに別れしなごりをも慰み給へとすゝめられ、さきだつ人はとにかくに、残るうき身の悲しさよと、思ひごともよしなしとて、ともかくも御はからひとありければ、一門の人々よろこびて、さるべき人をとたづね、もとの如く迎ひとり、移ればかはる世の中の、心は花ぞかし。秋の紅葉のちり過ぎて、その面影は姫君ばかりぞ歎かる。かくてかの繼母、此姫君を見たてまつりて、かゝる不思議のかたはもの、浮世にはありけることよとて、惡み給ふことかぎりなし。さてまゝはよの御腹に、御子一人いできたまへば、いよく此鉢かづきを見じ聞かじと、なみの起居の事までも、そらごとのみばかりの給ひて、常には父にぞんそう申す。鉢かづきは餘りやるかたなきまゝに、母の御墓へまゐりて、泣くく申させ給ふやう、さらでだに憂きにかすそふ世の中の、わかれを慕ふ涙川、沈みも果てずながらへて、あるにかひなきわが身ぞと、思ふにいとど不思議なるかたはのつきぬる事のうらめしさよ、繼母御前のにくみ給ふもことわりなり。したしき母上に捨てられまゐらせ、わが身何ともなりての後に、父御ぜんいかど御歎きのあるべきと思ふばかりを、心ぐるしく思ひしに、今の御母に姫君いでき給へば、はや思召しおかんこともなし、まゝはよ御前の惡み給ふゆゑ、たのみし父おろかなり、今はか

ちくして早く  
の意

ひなきうき身のいのち、とくして迎ひとり給へ、同じはちすの縁となり、心やすくあるべきと、流涕こがれて悲み給へども、生をへだつる悲しさは、さぞと答へる人もなし。

まゝはよ此由きと給ひて、鉢かづきが母の墓へまゐりて、殿をもみづから親子をも呪ふことこそ恐しけれと、まことをば一つもいひ給はず、虚言ばかりを父にたびく言ひければ、男心のはかなきは、まことと思ひ、鉢かづき呼び出だし、不道のものの心やな、あらぬかたはのつきぬるを、よに痛はしく思ひしに、咎もなき母御前兄弟を呪ふことこそ不思議なれ、かたはものを内におきては何かせん、いづかたへも追ひいだし給へとのたまへば、繼母これを聞きて、そばへうちむきて、さも嬉しけなる風情して笑ひける。さていたはしや、鉢かづきを引寄せて、召したるものを剥ぎ取りて、淺ましけなるかたびら一つ著せ参らせ、或野の中の四つ辻へ捨てられけるこそあはれなれ。さてこはいかなる浮世ぞと、暗に迷ふことちして、いづくへ行くべきやうもなし、泣くよりほかの事はなし。やよしばしありてかくなん、

野の末の路ふみわけていづくともさして行きなん身とは思はず

とうちながめ、足にまかせて迷ひあるき給ひけるに、おほきなる川のはたへうちつき給

のぞき臨み

ふ。こゝに立ちとまりて、いづくをさして行くともなく迷ひありかんより、此河の水屑となり、母上のおはします處へ参りなと思召して、河のはたへのぞき給へば、さすが幼き心のはかなさは、岸うつ浪もおそろしや、瀬々の白波はけしくて、そこはかとなき水の面、すさまじければいかどあらんと思へども、これを心のたねとして、既におもひきり、河へ身を投げんとし給ふとき、かくこそ一首つらねけり。

河岸の柳の糸のひとすぢに思ひきる身を神もたすけよ

かやうにうちながめ、御身を投げしづめけれども、鉢にひかれて御顔ばかりさし出でて流れける程に、獵する船の通りけるが、こゝに鉢の流れける、何ものぞと言ひてあけて見れば、かしらは鉢にてしたは人なり。舟人はをみて、あらおもしろや、いかなる者やらんとて、河の岸へ投げあぐる。やゝしばらくありて、起きなほりつくぐとあなじ、かくばかり、

河波の底にこの身のとまれかしなど再びは浮きあがりけん

などとうちながめ、あるにあらぬ風情して、たどりかねてぞ立ち給ふ。さてあるべきにあらざれば、足にまかせて行くほどに、ある人里に出で給ふ。里人これを見て、これは

久しき鉢―年ふ  
りたる鉢

えんぎやうだう  
―縁行道、散歩  
すること

いかなるものやらん、かしらは鉢、したは人なり、いかなる山の奥よりか、久しき鉢が變へん化して、鉢かづいて化けけるぞ、いかさま人間にては無しとて、指をさして恐しがりて笑ひける。ある人申しけるやうは、たとへ化物にてもあれ、手足のはづれの美しさよと、とりぐに申しける。さる程にその處の國司にてまします人の、御名をば山蔭の三位中將とこそ申しける、折節えんぎやうだうして四方よちの梢をながめつゝ、霞に遠里とほきの賤しが蚊遣火さしも草、そこひにくゆるうすけぶり、うはの空にてたち靡き、面白かりけるゆふぐれば、戀する人に見せばやと、眺めいだして立ち給ふところに、かの鉢かづき歩みよる。中將殿は御覽じて、あれ呼びよせよとの給へば、若さぶらひども二三人走りいで、かの鉢かづきをつれてまゐる。いづくの浦いかなるものぞとの給へば、鉢かづき申すやう、われは交野かたのの邊へんの者にて候ふ、母にほどなく後れ、思ひのあまりにかゝるかたはさへつきて候へば、憐むものも無きまゝに、難波の浦によしなしと、足にまかせて迷ひありき候ふと申しければ、さてく不便ふびんとおほしめし、戴きたる鉢を取りのけて取らせよとて、皆々よりて取りけれども、しかと吸ひつきてなかく取るべきやうもなし。これを入々御覽じて、いかなるくせ者ぞやとて笑ひける。

結句―其末

中將殿は御覽じて、鉢かづきはいづくへぞとの給へば、いづくともさして行くべき方もなし、母にはなれて結句けつこかゝるかたはさへつき候へば、見る人ごとにおぢ恐れ、憎がる人は候へども、あはれむ人はなしと申しければ、中將殿きこしめて、人のもとには不思議なる物のあるもよきものにて候ふとのたまへば、仰せに従ひておかれける。さて身の能のは何ぞとの給ひければ、何と申すべきやうもなし、母にかしづかれし時は、琴、琵琶、和琴、笙、箏、築、古今、萬葉、伊勢物語、法華經ほけきやう八卷、かすの御經ども讀みしよりほかの能もなし。さては能もなくば、湯殿におけとありければ、いまだ習はぬことなれど、時にしたがふ世の中なれば、湯殿の火をこそたかれけれ。明けぬれば見る人笑ひなぶり、にくがる人多けれども、なさけをかくる人はなし。あけくれ、御行水よ、鉢かづきとて、三更四更も過ぎざるに、五更の天も明けざるに、責め起されて、いたはしや、ふしなれぬ篠竹しのたけの、おのれと雪に埋うづもれて、ふし倒れたる風情して、ものはかなげに起きなほる、思ひを柴のゆふけぶり、立つ名をもくるしと打ちながめ、行水は沸きまゐらせ候ふ、はやり給へと催促する。くるれば御足の湯わかせや、鉢かづきと下知をする。うき身ながらも起きあがり、みだれた柴を引きよせながら、かくこそつらね給ひける。

ふしなれぬ―臥しと節とにかく

苦しきは折りたく柴のゆふけぶりうき身とともに立ちや消えまし

と、かやうに打ちながめ、いかなる因果のむくいにや、かよる浮世に住みそめて、いつまで命ながらへ、かほどに物を思ひねの、昔を思ひいでのと、胸は駿河の富士のだけ、袖は清見が關なれや、いつまで命ながらへて、憂きには絶えぬ涙河、流れて末もたのまれず、菊の裏葉におく露の、何となりゆく此身ぞと、ひとりくどきて、かくばかり、

松風の空吹きはらふよにいでてさやけき月をいつかながめん  
かやうに詠じ、足の湯をぞ沸かしける。

さる程に此中將殿は御子四人持ち給ふ。三人は皆々ありつき給ふ。四番めの御子、宰相殿御曹子と申すは、みめかたち世にすぐれ、優いづにやさしき御姿、むかしを申せば源氏の大將、在原の業平かとぞ申すばかりなり。春は花のもとに日をくらし、散りなんことを悲み、夏はすどしき泉の底、玉藻たまもに心をいれ、秋は紅葉落葉こうふおちばのちりしく庭ののみぢを眺め、月の前にて夜をあかし、冬は蘆間あしきのうす氷、池のはたに羽をとちて鴛鴦うさぎの浮寝うねものさびし、かさぬるつまもあらばこそ、ひとりすすみて立ち給ふ。御兄たちも、このうへも御湯殿へ入らせ給へども、かの御曹子ばかり残らせ給ひ、さよ更けてはるかになり

ありつき給ふ  
妻常し給ふ

このうへ殿と  
奥方

御湯殿して一垢  
を流すこと

て、ひとり湯殿へ入らせ給ふ。かの鉢かづき御湯うつしさふらふと申す聲やさしく聞えける。御行水とてさしいだす手足のうつくしさ、尋常けに見えければ、世に不思議におほしめし、やあ鉢かづき、人もなきに何かは苦しかるべき、御湯殿してまゐらせよとの給へば、今更むかしを思ひいだして、人にこそ湯殿させつれ、人の湯殿をばいかどするやらんと思へども、主命しうめいなれば力なし、御湯殿へこそまゐりける。御曹子は御覽じて、河内の國はせばしといへども、いかほどの人をも見てあれども、かほどにものよわく愛敬あいきやう世にすぐれ、うつくしき人はいまだ見ず、ひととせ花の都へ上りし時、御室おせむろの院の花見のありし時、貴賤きせん群集ぐんじゆして門前に市をなしつれども、その時にもこの鉢かづきほどの人はなし、いかに思ふとも此人を見捨てがたしと思はれける。いかに鉢かづき、思ひそめにし紅くれなるの、色はうつろふことなりと、君とわが中かはらじと、千秋せんしうの松に契りをはるかけ、松の浦の龜に久しくむすばれける。今よりのちはかの鉢かづきは、軒端の梅に鶯の、またはなれえぬ風情して、かくかへりごとをものたまはず。

はなれえぬ一原  
本「はなれぬ」と  
あり、一本によ  
りて改む  
かくかへりごと  
も「かく」は「と  
かく」の衍なる  
べし

かさねて御曹子は、これやこの龍田にはあらねども、くちなし色にたとへつゝ、物をいはねの松やらん、引きすてられし琴のねの、よそに引く手もあるやらん、もしふみかさ

さえやらでーは  
かゝしからず  
して

とこせくー床壇  
くの意なるべし  
きやうがいー境  
界

なるかたもあらば、逢はで空しく消ゆるとも、君ゆゑならばなかくに、うらみと更に思ふまじ、いかにくとの給へば、野飼の駒の人馴れで、心はたけく思へども、妹背いもせの川の中だちに、よしやあしやを知らざれば、何と申さんこともなし。よそに引く手もあるやらんと、の給ふことの恥しさに、調べの絲みな切れて、よそにひく手もさふらはず、なみのたちるに悲しきは、空しく別れし母の事、さては此身のさえやらで、いつまで命ながらへて、あらぬ浮世にすみ染の、色にもならぬ怨めしさを、歎きはんべりけると申しければ、宰相の君は聞召し、けにもことわりなりと思召して、かさねて仰せあるやうは、さればとよ、有爲うゑ轉變てんぺんの世の中に生れあひぬるはかなさよ、憂きはむくいと知らずして、神や佛を怨みつゝあかし暮らしてすすなり、御身もさきの世に野邊の若木の枝を折り、思ひし中をおしへだて、人に歎きをせさせつる報ひくいのほどの事ありて、親にも早くおくれつゝ、いまだいとけなき心に、物をおもひねの涙とこせく風情なり、みづから二十はたちのきやうがいまで、定むる妻はいまだなし、ひとり片敷くうたゝねの、枕さびしく住むことも、さきの世に御身と契ふかくして、その業因のつきねばこそ、めぐり／＼てとにかくに、今ことにおはすらん、世にいつくしき人なれど、縁えんなきかたへは目もゆかず、御身

千尋一傍訓原本のまゝ  
五道輪廻―地獄餓鬼畜生人間天上の五道に流轉すること  
六道四生―六道は地獄餓鬼畜生修羅人間天上四生は胎生卵生濕生化生舟のゐる―舟のすわること  
かきくらし―涙にかきくらし

に縁があればこそ、かくまで深く思はるれ、思ひそめにし昔より、今逢ふまでの言の葉こそ、末たのもしく思はるれ、鯨のよる島、虎ふす野邊、千尋の底、五道輪廻のあなたなる六道四生のこなたなる、妹背の川のみなかみの、涅槃の岸はかはるとも、君とわが中かはらじと、深く契をこめ給ふ。さて鉢かづきは漕ぐ舟のゐる風情して、君の仰せの強きまよ、思はぬながら靡きそめ、その夜はこゝにふし竹の、よよの契もあらがねの、末いかならんわが思ひ、知られぬそのさきに、いづくへも足にまかせて出でばやと、かきくらし思はれける。あはれなれば、宰相殿はいかに鉢かづき、さほどなにを歎かせ給ふぞよ、見そめ馴れにしよりも、露ちり程もおろかに思ふまじ、暮れなばやがてまるりなると、ひるもをりく通ひ、これを見て慰みたまへとて、黄楊の枕と横笛をとり添へてぞおかれける。

其時いとど恥しさは、やるかたもなし。わが人のやうにもあらばこそ、人の心は飛鳥河、夜のまにかはる習ひのあるまでも、頼まんともおもひなん、あるに甲斐なきありさまにて、見えぬことの恥しさよと、かきくらし泣き給ふ。御曹子は御覽じて、この鉢かづきの風情を、ものによく譬ふれば、楊梅桃李の花の香に、雲間の月のさし出でて、二月な

かばの絲柳の風に亂るゝよそほひも、籬かきのうちの撫子なでしこの露重けに物よわく、はづかしけ  
にてそばみたる顔の愛敬あいさやうのいつくしく、楊貴妃李夫人もいかでか是にまさるべきと、不  
思議におほしめしける。同じくは此鉢をとりかけて、十五夜の月の如くに見るよしもが  
なとぞ思はれける。さて若君は湯殿のかたはらの、柴つむ臥戸ふしどをたちいでて、わが御か  
たへ歸りつゝ、軒端の梅を御覽じても、いつしか鉢かづき如何にさびしく思ふらん、今  
日の暮るゝを待つほどは、住吉の根ざしそめにし姫小松、千代まつよりも尙久しくぞ思  
はれける。鉢かづきは黃楊つげの枕と、御笛をおくべき處のあらざれば、もち煩ひてゐたり  
ける。かくてやうく東雲しのめもあくると告ぐる關路せきぢの鳥、まだ横雲も引かざるに、御行水  
よ、鉢かづきと責められて、御湯はわきさふらふ、取らせ給へと答へつゝ、いぶせき柴  
を折りくべて、かくこそ詠じけれ、

くるしきは折り焚く柴のゆふけぶり戀しきかたへなど驛くらん

とうちながめければ、湯殿の奉行きゝつけて、かの鉢かづきはつぶりこそ人には似ず、  
ものいふ聲色こゑいろわらひぐち、手足のはづれの美しさは、これに疾さくから住ませ給ふ御女房衆  
も、究めてこれには劣りなり、ちかづきて彼の人と契らばやとは思へども、あたまを見れ

まうく——蒙々  
なるべし

ばまうくとして、口よりしたは見ゆれども、鼻よりうへは見えもせず、朋輩衆にも笑はれ、なか／＼恥しやと思ひもよらぬぞことわりなる。さるほどに春の日ながしと思へども、其日もやうくくれないの、たそがれ時や、ゆふがほの人の心は花ぞかし、彼の宰相の君、いつよりも花やかに装束しやうそくして、湯殿かたはらの側の柴ふしぎの臥戸にたゝすみ給ふ。

鉢かづきこれを知らずして、暮はと契りしかねごとの、はやよひのまも打過ぎぬ、人をとがむる里の犬、聲するほどになりにつけり。來こんまでとのかたみの枕と笛竹をとりそへもちてかくなん、

君こんとつけの枕や笛竹のなどふし多きちぎりなるらん  
とうちながめければ、御曹子とりあへず、

いく千代とふしそひて見んくれたけの契は絶えじつけの枕に

さて宰相殿は、比翼連理と浅からず契らせ給ふ。包むとすれどくれなるの、洩れてや人の知りぬらん、宰相殿こそ、鉢かづきがもとへ通はせ給ふ浅ましさよ、もとより高きも賤しきも、男はあるならひ、立ちより給ふとも、あの鉢かづきが近づき参らせんと思ふ心の、ふとくじんさよと、惡まぬ人はなかりけり。ある時よそより客人きたり、夜ふけがたま

ふとくじん——不  
得心にて、ふ心  
得の意

でひま入り、遅く入らせ給ひければ、鉢かづきおほつかなく思ひて、かくばかり、人まちてうはの空のみながむれば露けき袖に月ぞやどれる

と、かやうに打ちながめければ、いよくやさしく思召し、ちぎり深くはなりけれども、捨てべきやうはまします。昔が今に至るまで、わが身にかゝらぬ事までも、人のいふならひにて、宰相殿は世にも人なきやうに、かゝる御ふるまひかな、をかしき御心かなと笑ひけるほどに、母上きこしめし、みなく、ひがこ僻言をや申すらんに、めのと見せよとの給へば、乳母見て、まことにて候ふと申しける。父母呆れしばし物をものたまはず、やゝあつていかに乳母めのきけ、とかく宰相の君を諫め、鉢かづきにちかづかぬやうに計らへとのたまへば、めのと若君の御前おんまへにまゐり、何となく御物がたり申し慰めて、いかに若君さま、まことしくは候はねども、湯殿の湯わかし鉢かづきがもとへ通はせ給ふよし、母上きこしめして、よもさやうには有るまじけれども、もしまことならば、父の耳に入らぬさきに鉢かづきを出だすべしとの仰にて候ふと申しければ、若君のたまふやうは、思ひまうけたる仰せかな、一樹のかけ一河の流を汲むことも、他生の縁とこそ聞け、いにしへもさる事あればこそ、主しゅの勘當かうぶり、千尋ちいうの底にしづむとも、いもせの中はさもあらず、

無間―無間地獄

とのうへ―殿、  
奥方れんぜい―乳母  
の名冷泉  
おほろけ事―尋  
常の事  
みたち―御性質

親の御不審かうぶりて　たちまち無間<sup>むけん</sup>にしづむとも、おもふ夫婦<sup>かみふ</sup>の中ならば何か苦しかるべきぞ、とのうへの御耳に入り、たちまち御手にかゝるとも、かの鉢かづきゆゑならば、すつる命は露ちり程もをしからず、かの人を棄てんこと思ひもよらず、この事用ひ申さぬとて、鉢かづきもろともに追ひだし給ひなば、いかなる野の末、山の奥に住むとても、思ふ人に添ふならば、ゆめく悲しかるまじとて、わが御かたを御いでありて、柴つむとほそに入り給ふ。日頃は人目をつゝませ給ひしが、乳母まるりて申してよりのちは、終日鉢<sup>ひめちす</sup>かづきがもとにぞる給ひける。さるほどに御兄たちも一門ざしきに叶ふまじとありけれども、厭ふけしきもまします、いよく人目をも憚らず、朝夕通はせ給ひける。母上仰せけるやうは、さもあれ鉢かづきは、いか様變化<sup>へんひ</sup>の者にて若君を失はんと思ふやらん、いかどせん、れんぜいと仰せける。れんぜい申されけるは、かの君はさならぬことさへ、色深く物はぢをし給ひて、おほろけ事までもつゝましけなるみたちにて渡らせ候へども、此事に於ては恥ぢ給ふけしきも候はず、さあらば公達<sup>こうだつ</sup>のよめくらべをし給ひて御覽候へ、さやうに候はど　かの鉢かづき恥しく思ひて、いづくへも出で行くこと候はんと申されければ、けにもとおほしめし、いつく公達のよめくらべあるべ

しと、口々にふれさせける。さるほどに宰相殿鉢かづきがもとへ御入りありて、あれ聞きたまへ、われくゝを追ひ失はんために、嫁くらべといふこと申しいだしてふれ候へば、いかゞせんと涙を流し給ひければ、鉢かづきもともに涙を流し申すやう、われゆゑに君をいたづらになし申すべきか、われくゝいづくへも行かんと申しければ、宰相殿仰せけるは、御身に離れては片時かたときもゐられ候ふまじ、いづかたへなりとも共に出でんとの給へば、鉢かづき何と思ひわけたる方もなく、涙を流しるたりけり。さてとかく過ぎゆく程に、よめ合あはせの日にもなりぬれば、宰相殿鉢かづきと二人ふたり、いづくへも立ちいでんと思召しけるこそあはれなり。さるほどに夜も明方になりぬれば、召しも習はぬ草鞋わらうづしめはき給ひて、さすが父母すみなれ給ふことなれば、御名残惜しくおほしめし、おつる涙にかきくもり、今一度ひまたひ父母を見奉りて、いづくとも知らず出でんことこそ悲しけれと思召せども、遂に一度は離れまゐらせんものと思ひきり給ふ。鉢かづきこの由みたてまつり、われひとりいづ方へも出でまゐらせん、契ふかく候はゞ又めぐりあひ候はんと給へば、うらめしき事を仰せられ候ふものかな、いづく迄も御とも申し候はんとて、かくなん、君思ふ心のうちは湧きかへる岩間の水にたぐへても見よ

と、かやうに遊ばし立ちいでんとし給ふ時、鉢かづきかくばかり、わが思ふ心のうちも湧きかへる岩間の水を見るにつけてもなどとうちながめ、また鉢かづきかくなん、

よしさらば野邊の草ともなりもせで君を露ともともに消えなんとあそばしければ、また宰相殿かくばかり、

路のべの萩の末葉の露ほども契りて知るぞわれもたまらん

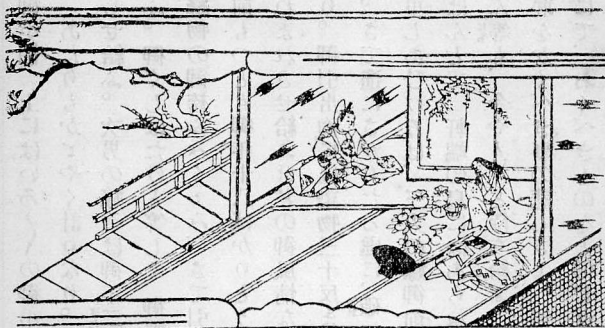
とあそばして、既に出でんとし給ふが、さすが御なごりをしく、悲しく思ひ給ひて、左右なく出でやらず、たゞ御涙せきあへず。かくて留まるべきにもあらざれば、夜もやうやう明方になりぬれば、急ぎいでんとて涙とともに、二人ながら出でんとし給ふ時に、いたゞき給ふ鉢かつぱと前に落ちにけり。

宰相殿おどろき給ひて、姫君の御顔をつくぐと見給へば、十五夜の月の雲間を出づるに異ならず、髪のかより、姿かたち何に譬へんかたもなし。若君うれしく思召し、落ちたる鉢をあけて見給へば、二つかけごの其下に、金の丸かせ、金の盃、銀のこひさけ、砂金にて作りたる三つなりの橘、銀にてつくりたるけんほのなし、十二ひとへの御小袖、

千入の袴―幾度  
染めて色濃き袴

世間さゞめきけ  
る―世間の物音  
騒しくなる

不得心―心得の  
無きこと



れなるの千入ちしほの袴、かずの寶物たからものを入られたり。  
姫君これを見たまひて、わが母長谷の觀音を信  
じ給ひし御利生とおほしめして、嬉しきにも悲  
しきにも、さきだつものは涙なり。さて宰相殿  
これを見給ひて、これほどいみじき果報にてま  
します事の嬉しさよ、今はいづくへも行くべき  
にあらずとて、嫁合の座敷へいでんとこしらへ  
給ふ。既にはや夜も明けければ、世間せけんさゞめき  
ける。人々いひけるは、これほどの御座敷へあ  
の鉢かづきが出でんと思ひ、いづくへも行かぬ  
ことの、不得心ふざしんさよと笑ひける。さる程にとく  
とくとふれければ、嫡子の御よめ御前は尋常な  
る御装束にて、御年の程二十三ばかりとうち  
見えて、頃は九月なかばの事なれば、肌には白

サマシ―生絹

き御小袖、上にはいろ／＼の御小袖めし、くれなるの袴ふみくゝみ、御ぐしはたけに餘り、あたりもかどやく計りなり。御引出物には唐綾十疋、小袖十かさね、廣蓋に入れまゐらせ給ふ。次男の嫁ごは御年二十ばかりにて、尋常にして氣高く、人にすぐれて見え給ふ。御ぐしはたけと等しく、御装束は肌にはすゞしの御袷、上には摺箔の御小袖、紅梅の縫物の御袴ふみくゝみ、さて引出物には、小袖三十がさねまゐらせ給ふ。三男のよめ御前もつとも御年十八ばかりとうち見え、御ぐしたけには足らねども、月に嫉まれ花にそねまれさせ給ふほどの御風情なり。御装束は肌には紅梅の御小袖、上には唐綾著たまへり。御引出物には染物三十反まゐらせ給ふ。三人のよめ御前、いづれも劣らぬ御姿なり。さて遙にさがりたる處に、破れたる疊をしかせ、鉢かづき置かんとこしらへける。人申しあひけるは、三人の嫁御前は見奉りぬ、鉢かづきが浅ましき體にて出でんを見て笑はんとて、軒端の鳥にはあらねども、羽づくろひして待ちゐたり。さて三人のよめごぜん等も、今や／＼と待ち給ふ。又しうと御前仰せけるは、いづくへも行かずして、只今恥をかくべき事の悲しさよ、何しによめ合などいはずとも、善きも悪しきも知らぬ體にて、おくべきものをと仰せける。さるほどに鉢かづき遅しと、たび／＼使たちけれ

翡翠のかんざし  
—緑髪

いとほしきに—  
いとほしさにの  
衍か

ば、宰相殿きこしめし、只今それへまゐると仰せければ、人々見て笑はんとぞじよめきける。出でさせ給ふありさま、物によく／＼譬ふれば、ほのかに出でんとする月に雲のかゝる風情にて、御かほばせ氣高くいつくしく、御姿は春のはじめの糸櫻の、露のひまよりもほの見えて、朝日のうつろふ風情に異ならず、霞のまゆすみほのぐと、鮮妍たる兩鬢は秋の蟬の羽にたぐへ、宛轉たる御かほばせは、春は花にねたまれ、秋は月にそねまれたまふ御風情なり。御年のよはひ十五六ほどに見えさせ給ふ。御装束には、肌には白き練のきぬ、上には唐綾、紅梅、紫、いろ／＼の御小袖、くれなるの千入の御袴ふみくよみ、翡翠のかんざしゆりかけて歩ませ給ふ御姿、偏に天人の影向もかくやと思ひしられけり。待ちうけて見たまふ人々、みな／＼目を驚かし、興さめてぞおはしける。宰相殿の御心の中の嬉しさ限りなし。さるほどに御座敷一段さがりて、こしらへたる處になほらんとし給ふ時に、しうと三位の中將殿、いかで天人の影向を下座におくべきとて請じさせたまふ。

あまりのいとほしきに、母御前のひだりの膝元へ呼びまゐらせ給ひける。さてしうと殿への御引出物には、しろがねの臺に黄金の盃する、黄金にてつくりたる三つなりの橘、

目を驚かす一原  
本、目をこの二字  
なし、一本によ  
りて補ふ

たえいりー執心  
に

こがね十兩、唐綾、織物の御小袖三十かさね、唐錦十反、卷絹五十疋、廣蓋につませまる  
らせらる。しうとめ御前への御引出物には、染物百端、黄金のまるかせ、しろがねにて作  
りたるけんほの梨の枝をり、こがねの臺にすゑて參らせらるゝ。人々みてみめかたち、  
衣裳、御引出物にいたるまで、勝りはすれども人に劣らずと、目を驚かすばかりなり。  
三人の兄嫁御ぜんたちをも、初めはうつくしく思召しけれども、此姫君にあはすれば、  
佛の御前に惡魔外道がゐるたるに異ならず。兄御たち仰せけるは、いざやのぞきて見んと  
て、のぞき見給へば、あたりもかどやくほどの美人なり。皆々不思議に思しめして、何  
と申すべき言の葉もなし。楊貴妃李夫人もこれにはいかど優るべき、とても人間に生れ  
なば、かやうの人とこそ一夜なりとも契りおかまほしけれと、人々うらやみ給ひけり。三  
位の中將殿おほしめしけるは、このほど宰相の君たえいり思ひつることこそことわりな  
れと思しめしける。さて御盃まゐりければ、しうとめ御前きこしめし、やがて姫君にさ  
し給ふ。其後獻々まはりければ、三人の兄嫁御ぜんたち、談合あるやうは、みめは下臈  
によらぬなり、管絃をはじめ、和琴をしらべさすべし、和琴はことにその源を知らせ  
ざれば、左右なくひかれぬものなり、宰相殿はそのみなもとをもあきらめ給へば、のち

には教へ給ふとも、今夜のうちには教へ給ふことなるまじ、いざや始めんとて、兄嫁御  
ぜんは琵琶の役、次郎よめごは笙を吹き給ふ。とのうへは鼓うち、姫君は和琴御しらべ候  
へと責められける。其時姫君おほせけるやうは、かやうの事はいまだ聞きはじめにて候  
へば、すこしも存ぜず候ふと御辭退あり。宰相殿御覽じて、我身を姫君と見よかし、ゆ  
きてひかんものと思しめしける。其時姫君御心のうちに思すやうは、われを賤しきも  
のと思ひ、かやうにして笑はんためと思召し、われもむかし母にかしづかれし時には、朝  
夕手なれし樂の道なれば、ひかうずものと思召し、さらば引きてみ申し候はんとて、そ  
ばなる和琴ひきよせ、三べんしらべ給ひける。宰相殿御覽じて、嬉しきことがぎりなし。  
御ぜんたち御覽じて、歌をよみ、手かくことも、後には宰相殿御教へあるべし、只今の  
うちには教ふこともなるまじ、さらば歌をよませ笑はんと、談合なされ、これ御覽ぜよ  
姫君、櫻が枝に藤の花、春と夏とは隣なり、秋はことさら菊の花、これにつき姫君一首あ  
そばし候へと仰せければ、姫君きこしめし、あらむつかしの事を仰せ候ふものかな、わ  
れくが能には、此ほど湯殿にさぶらひて、朝夕てなれし水車、汲みあけしより外のこと  
はなし、歌といふことはいかやうなる物やらん、すこしも存ぜず候ふ、まづく御ぜん

御客もじ一何々  
文字といふこと  
一時流行の語に  
して、御客とい  
ふに同じ

あはぬ事―道理  
に合はぬ事

たちあそばされ候へ、其後はともかくも申して見んとありければ、御ぜんたち仰せけるは、姫君はけふの御客もじにてましませば、まづく一首あそばし候へと責められける。その時姫君一首とりあへず、

春は花夏はたちばな秋は菊いづれの露におくものぞうき

と、かやうにあそばしける。御筆のすさび、道風が震ひ筆もかくやらんと目をおどろかすばかりなり。人々これを見て、いかさま此人は、古の玉藻の前か、恐しやなどと申す。さるほどにまた御盃いできれば、しうと御ぜんきこしめし、姫君に御さしありて、御着申さんとて、我所領七百町とは申せども、二千三百町のところなり、一千町をば姫君にまゐらす、また一千町をば宰相の君にとらすべし、残る三百町をば三人の子どもに取らすなり、百町づゝわけて取れ、これを不足に思ふものあらば、親とも子とも思ふべからずと仰せければ、兄御たちきこしめし、あはぬ事とは思へども、貴命なれば力なし、今よりしては、宰相の君を總領と思ふべしと、三人同心し給ひけり。さるほどに姫君にはれんぜいを初めとして、女房たち二十四人つけ奉り、宰相殿のすませ給ふだけの御所ごしょへうつらせ給ふ。かくて過ぎゆきける程に、ある時宰相殿仰せけるやうは、いかさま御

身はたゞ人とは思はぬなり、御名のり候へとありければ、ありのまゝに語らんとは思しめしけれども、まゝはゝの名を立つるにやあたらんと思ひ、かれこれとりまぎらかし名のり給はず。其後姫君は母上の御菩提懇にとぶらひ給ふ。かくて過ぎゆく程に、公達あまた設け給ひて、御よろこび限りなし。これにつけても捨てられし故郷ふるさとの父御前を戀しく、御公達をも見せまゐらせたく思しめしける。さるほどに故郷ふるさとのまゝはゝ御前は、慳貪けんこん者しゃなるゆゑに召使はるゝものも、かなたこなたへ逃げはしり、後には貧しくなり、ひとりもちたる姫をもとふ人もなし。御ふたりの中もあしくなりければ、貧しきすまひ何かせん、心にのこる事もなしとて、父御ぜんはいづくとも知らず、修行にたち出で給ふ。つくづく物を案ずるに、さりにし北の方、子なき事を悲みて長谷にまうで、さまぐ祈り、観音の御利生により、姫を一人まうけしに、母むなしくなり給ひて後、あらぬかたはつきけるを不思議に思ひしに、親ならぬ親とて、おそろしや、いろ／＼にざんそうを言ひけるを、まことと思ひ追ひいだしつる事ふびんの不便さよ、其身が人のやうにもあらばこそ、いづくの浦に住み、いかなる憂きめをも見るらん、不便のものかなと思しめたまふ。さるほどに父御ぜん長谷の観音へ御まゐりありて、鉢かづきの姫いまだ浮世にあるならば

しされー退け

わがせんぞーせんぞは先祖にて、自家の來歴との意なるべし

今一度めぐり逢はせてたびたまへと、肝膽を碎き祈り給ひける。その後宰相殿、帝の御意にいらせ給ひ、みかどより大和、河内、伊賀、三箇國をくだされければ、御よろこびのために長谷の觀音へ御まゐりある。御一門御公達花をかざり、金銀をちりばめざよめき給ふ。さるほどに姫君の父御せんは、觀音の御前おんまへに念誦してゐる給ひけるを、殿ばらどもがこれを見て、御堂のうちが狭きとて、そこなる修行者あなたへしされとて、椽よりそとへ追ひいだす。かたはらに立ちより給ひ、公達きんたちを見奉り、さめくと泣き給ふ。人々これを見て、こよなる修行者はいかなる事を思ひ泣くぞと問ひければ、わがせんぞありのまゝに語り、恐れながらこの御公達、わが尋ぬる姫に似させ給ふとのたまへば、姫君きこしめして、その修行者爰へ呼べとありければ、椽の上まで呼びあけける。姫君御覽じて、御年より面おもやせ給へども、さすが親子の御事なれば、人目も憚らず、これこそいにしへの鉢かづきの姫にて候へとて、御いでありければ、父御前きこしめし、これは夢か現か、ひとへに觀音の御利生なりとの給ひければ、宰相殿きこしめし、さては姫君は河内の交野の人にてましますか、さればこそたゞ人とは思はぬものをとの給ひて、御公達一人と、姫君の父御せんとをば、河内の國のぬしになしまるらせ、すゑ繁昌にすま

せ給ふ。さてまた宰相どのは、伊賀の國に御所をつくらせ、子孫繁昌にすませ給ひけり。これたゞ長谷の觀音の御利生とぞ聞えける。今に至るまで觀音を信じ申せば、あらたに御利生ありと申し傳へはんべりける。この物語をきく人は、常に觀音の名號を十返づつ御唱へあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。

頼みてもなほかひありや觀世音二世安樂のちかひ聞くにも